

<<口頭発表>> (9月5日 10:00-10:30)

【1号館B棟2F B2講義室】

死者に語り掛けるスピーチとはどのようなものか
—弔辞における故人の呼称に着目して—

利岡 真帆

本発表では世界的にみても特殊性を有する弔辞を資料とし、その中の故人の呼称に着目し、弔辞の談話構造と使用形式の変遷について考察した。発表者はこれまで**1890年代から2000年代**にかけての弔辞を**843通**収集しており、本発表では、それらのうち実際に読み上げられたと見なせる**462通**について、これを一種の談話資料とみなして分析を行った。収集した弔辞をみると、**1通**の弔辞内で複数の呼称を使用するものが多数存在した。そこで、弔辞の談話構造を、開始部、主要部、終了部に**3分**し、各呼称に対して談話展開上の出現位置の調査を行った。さらに、**1960年代以降**から使用が見られなくなった「英霊」に注目し、その使用の変遷をたどる調査を行った。その結果、弔辞に用いられる故人の呼称のバリエーションが弔辞の談話展開を示す標識になっていること、また弔辞に用いられる「英霊」の変遷から故人の呼称の選択に戦争の影響が認められることが明らかになった。

<<口頭発表>> (9月5日 10:35-11:05)

【1号館B棟2F B2講義室】

わかりやすい公共サインのあり方を考える

本田 弘之, 岩田 一成, 倉林 秀男

本発表は各国の交通機関における公共サインを分析対象とし、外国人にとってのわかりやすさという観点から、公共サインのあり方を考える。発表者は日本および海外数か国の空港・鉄道駅などで調査をおこない、公共サインの写真を収集した。これらの写真を比較分析してみると、公共サインの掲示には、発想が異なる3つのパターンがあることがわかる。それは、①英語で表記するパターン、②多言語化を進めていこうとするパターン、③言語にたよらずピクトグラムを利用するパターンである。本発表では、この三つのパターンがもつ利点と問題点を社会言語学的に考察し、③のピクトグラムを精緻化していく方向が一番妥当ではないかという主張を行う。

<<口頭発表>> (9月5日 11:10-11:40)

【1号館B棟2F B2講義室】

文法性判断の社会言語学
—社会統語論の目論見—

吉川 正人

音素が心的に実在しているように感じられるのはひとえに識字教育の結果であり、文字の知識なしでは音素の心的実在性はないという主張 (Port 2007) や、話しことばにおいて節の「従属」は実質的には存在せず、全ては「追加的」で、真に従属的なのは書き言葉のみであるという主張 (Ong 1982) などから浮かび上がるのは、言語学者が存在を仮定し分析の対象としている言語の抽象的な規則やパターンの一部は、書き言葉の発明とその運用によってもたらされた、いわば「付加物」に過ぎない、という可能性である。本発表では、この考えを押し進め、主に理論言語学が想定するヒトの持つ「文法直観」は、本質的には書き言葉を代表例とする何らかの「規範」を想定し、その規範との比較によって得られる、極めて社会的な推論の結果得られるものである、という仮説を、いくつかの事例と共に提示する。

<<口頭発表>> (9月5日 10:00-10:30)

【1号館C棟2F C6講義室】

“おネエ”のキャラクターの言語行動
—ジェンダーを演出する資源のクロスジェンダー的使用—

河野 礼実

先行研究において「おネエことば」はジェンダー規範を利用した創造的言語行為であると指摘されており、その言語行為について調べることは日本語とジェンダーの研究分野において意義があると考えられる。しかし先行研究の多くは、印象レベルあるいは少数の話者の限られた例を材料にした分析に留まっている。そこで本発表では、複数の具体的データから「おネエ」たちの話し方について実証的研究を行った。

分析対象はテレビに出演する「おネエ」タレントと呼ばれる人物、分析材料はバラエティ番組の録画データ(2013, 2014年放送)である。言語形式、言語随伴行動、音声、視覚的要素の4つの観点から分析を行った結果、その言語行動の特徴が明らかになった。また、比較対象として(1)他のメディア(映画、テレビドラマ、小説、漫画)に登場する「おネエ」のキャラクター、(2)2006, 2007年に放送された「おネエ」タレントが出演するバラエティ番組についても分析を行った。

<<口頭発表>> (9月5日 10:35-11:05)

【1号館C棟2F C6講義室】

和式旅館における観光接触場面のインターアクション
—観光接触場面での接遇と日本語の役割—

加藤 好崇, 宇佐美 まゆみ

訪日外客数が増加する現在, 日本人スタッフが日本人客をもてなす従来の母語場面の「接遇」が接触場面においても機能するとは限らない. 本研究では外国人ゲストと日本人ホストが参加する場面を「観光接触場面」と呼び, 日本人ホストのインターアクションの分析と, 接遇のあり方や日本語の役割について考察を行う.

調査対象は複数の条件から選定した8つの小規模和式旅館の観光接触場面とした. 日本人ホストに具体的な場면을想起してもらい, そのインタビュー結果を主なデータとして分析を行った.

その結果, 談話形式の意図的修正, 会話量の増加, ゲストとホストのポジティブ・ポライトネス化などの特徴が見られた. また, 媒体は英語使用が前提となっていたが, 日本語にスイッチするケースも報告されている. 説明や注意などの言語機能ではなく, 「お土産」としての日本語, ホスピタリティ機能を持つ日本語の開発が接触場面の新しい接遇に繋がると思われる.

<<口頭発表>> (9月5日 11:10-11:40)

【1号館C棟2F C6講義室】

謙譲語「～テオリマス」に指標される職務遂行モード
—サービス業従事者へのインタビューデータから—

延与 由美子

本論は、Ochsの指標性のフレームワークに基づき、サービス業の新人研修者及び新入社員による謙譲語「～テオリマス」の使用に焦点を当てることにより、「～テオリマス」が実際の談話でどのような社会的意味を持ち得るかを明らかにすることを目的とする。調査対象は、接客に携わる6業種10企業の新人研修担当者10名及び新入社員7名である。各々15分から40分の個別インタビューの録音音声から、「～テイル」の謙譲語である「～テオリマス」及びその活用形の使用例を抽出し、(1)参加者別頻度、(2)「～テオリマス」の前の動詞の分類、(3)使用例の分析から窺われる指標上の特徴を分析した。その結果、「～テオリマス」が職業的な姿勢を指標し得る言語表現であり、研修担当者が自らの職業的役割から発言する場合に、「～テオリマス」が使われることが多いことが示された。

<<口頭発表>> (9月5日 10:00-10:30)

【1号館C棟1F C3講義室】

生活者の日本語コミュニケーション力とその要因を探る
—中国語母語話者の対面コミュニケーション力の測定結果から—

小川 珠子, 安場 淳

同じ外国人生活者の中に、日本語で複雑な内容でもやりとりのできるコミュニケーション力を習得し得た人と、長く滞在してもそこまでの力を習得できないままにいる人がいる。両者の持つ背景にはどのような違いがあるかを知ることが今後の学習支援システム構築の上で大きな意味があると考えられる。滞在5年以上の中国語母語話者の生活者110名について、一対一の対面コミュニケーション力(以下会話力)測定を行った。その結果、言語環境に恵まれている人の会話力はそうでない人に比べ、有意に高いことがわかった。また、来日初期の集中的な研修機会の有無との関わりにおいては、会話力の上位・下位で5%水準で有意差が見られた。但し、ここにも言語環境が大きく関与している。当日は、これらの要因との関係で注目すべきいくつかの事例についても取り上げたい。

<<口頭発表>> (9月5日 10:35-11:05)

【1号館C棟1F C3講義室】

日本生育外国人児童の作文力の発達に関する調査研究
—「産出量・文の複雑さ・内容」の分析を通して—

齋藤 ひろみ, 菅原 雅枝, 鳶田 陽子, 西島 道, 工藤 聖子, 李 佳耀

日本生育外国人児童 (F) が多数在籍する学校で収集した2-6年生の237の作文を分析し, 日本人児童 (J) との比較を通してその発達の特徴を探り, 環境によるリテラシー発達の違いについても検討した. 対象作文は, 遠足後に書いた「出来事作文」である. 子どもたちの背景は, ベトナム・中国が多く, 全8か国であった. 分析は, 産出量と文の複雑さを量的に, 内容を質的に分析した. その結果, 産出量は, Fは5年でJと同程度になり, その後急増する. 文の複雑さに関して, 複文割合が2年時にはJがFより高いが4年時点で同等になる. ただし, 4年時の複文内述語数はFはJよりかなり少なく, 複文の構造には違いがありそうである. また, 4年生でJが急激に内容に豊かさが出てくるのに対し, Fは4年以降での発達が目覚ましかった. 全体として, Jが出来事を記述する力を中学年までに発達させるのに対しFはその発達を数年遅れて追っていると考えられる.

<<口頭発表>> (9月5日 11:10-11:40)

【1号館C棟1F C3講義室】

留学における語用論的能力の習得
—発話行為を含むインターアクションの変化—

深澤 英美

本研究の目的は、留学における語用論的能力の習得、特に発話行為を含むインターアクションにおけるストラテジーの習得を明らかにしようとするものである。研究参加者は英語専攻ではない大学生4名で、それぞれ約半年間英語圏の大学に留学した。データ収集は留学前に発話行為（依頼・謝罪・不満・断り）のロールプレイを英語母語話者と1対1で行った。留学期間中は定期的に研究参加者と連絡を取り、発話行為の経験や生活の様子などをインタビューした。留学後にも再度同じロールプレイを行った。すべてのロールプレイを書き起こし、留学前と留学後のインターアクションを比較し、その変化に注目した。その結果、次の2点が明らかになった。第一に、発話行為の表現は留学後に変化しているものとしていないものがあった。第二に、留学後は発話行為を含むインターアクションにおいて【理由を述べる】【前置きをする】などのストラテジーの増加がみられた。

<<口頭発表>> (9月6日 10:00—10:30)

【1号館B棟2F B2講義室】

Managing Interactional Tasks in an English Discussion Seminar

八木 淳一

The ability to speak in a foreign language makes an important part of language learning. Group discussion is one site in which such a competence of learners can be observed. There have been a considerable number of attempts to establish a clear-cut framework for the oral proficiency (e.g. ACTFL, 2012; Canale & Swain, 1980). Such a conventional, cognitive approach treats speakers' competence simply as externally measurable by pre-established categories and therefore fundamentally ignores the situated and sequentially organized characters of interaction (see Markee & Kasper, 2004). This study observes the recording of two groups in an English-speaking discussion seminar and illustrates from a conversation analytic perspective how NNS expert/novice users of English deploy their interactional resources and accomplish multiple tasks sequentially in the L2 interaction.

<<口頭発表>> (9月6日 10:35-11:05)

【1号館B棟2F B2講義室】

英語教師が用いる談話標識の機能について
—BTSJを用いた教室談話分析から—

石野 未架

本研究は、学習者と母語（日本語）を共有する英語教師が、授業を英語で行う際に用いる言語使用上の方略を、社会言語学的視点から分析したものである。BTSJ(宇佐美, 2007)を用いた教室談話分析の結果、教師の母語から英語へのコードスイッチング（CS）開始直前に、特定の談話標識「OK」が頻繁に挿入されることがわかった。この談話標識が英語から母語へのCS直前に挿入される頻度は、全体の4%であるのに対し、母語から英語へのCS直前に挿入される頻度は64%であった。このことから、談話標識OKの挿入は母語から英語へのCS時に限られた、この教師の言語使用上の特徴であり、談話標識の挿入が、教室の言語規範を示すコンテキスト化の合図となっていると解釈することが出来る。発表では実際のデータを提示し、談話標識OKが、挿入された文脈において言語使用上の方略になっていることを説明する。

<<口頭発表>> (9月6日 11:10-11:40)

【1号館B棟2F B2講義室】

生徒の語用論的能力を育成する上でALTは役に立っているか？
—高等学校のALTに対する大規模アンケート調査の結果から—

清水 崇文, 豊田 春賀, 吉田 麻里子

本研究は、高等学校の英語教育における語用論的能力（状況や相手に応じた適切な言語運用の知識）の指導の実態をALT（外国語指導助手）の視点を通して明らかにすることを目的として行われた。調査はインターネットのアンケート回収サービスを利用し、多肢選択式および自由記述式の50の質問項目について、262名のALTの回答を得た。結果として、日本人教員は授業内外で語用論的に不適切な発話をしているが、ALTが明示的なフィードバックをすることは稀であること、授業中の日本語教員の説明や教材の内容にも適切な言語運用に関する誤った情報が散見されるが、ALTが修正する頻度は少ないことがわかった。この結果から、日本語教員の不十分な英語運用力や語用論的知識の欠如、教材内容の不備が生徒のコミュニケーション能力を育成する障害となっているとともに、ALTの存在がこうした問題を解消する役割を果たせていない可能性が示唆された。

<<口頭発表>> (9月6日 11:45-12:15)

【1号館B棟2F B2講義室】

依頼の談話分析から見るWill系とCan系の語用論的な分業

林 可奈子

本発表では、英語の慣習化された間接的依頼表現の中で代表的とも言えるWill(Would)you...?とCan(Could) you...?に注目し、それぞれの表現が使われている依頼談話を映画のトランスクリプトを使用して収集し、分析する。

Will(Would) you...?とCan(Could) you...?は両者とも依頼として非常に汎用性の高い表現ではあるが、実際に使用されている談話の流れやその交渉のあり方を詳細に分析していくと、どのように依頼を提示し交渉するかという点で違いが見られる。

そこで本発表では、このような依頼の交渉姿勢の違いを基に、Will(Would) you...?とCan(Could) you...?が、依頼という発話行為の中で互いに分業し合っているのではないかとすることを主張する。

<<口頭発表>> (9月6日 10:00-10:30)

【1号館C棟2F C6講義室】

指示詞型フィラーの用法についての日中対照
—日本語「あのー」と中国語「那个 nage」の機能をめぐって—

葛 欣燕

本稿では、日本語と中国語のインタビュー番組の文字化資料をデータとし、それぞれの事例に基づき、発話内容調節と対人関係調節及び相互行為上の役割について、詳細に分析した。さらに、それぞれの機能の使用率から、両言語の使用実態に対する考察を行った。その結果、①「あのー」の使用率は「那个 nage」を遥かに上回っている、②日本語「あのー」は、発話の内容を調整するだけでなく、対人的な調整や活動の推移の調整に関わる機能を有しているのに対し、中国語「那个 nage」は発話内容の調整のみに使われている、③会話分析の観点から、「那个 nage」は「あのー」のように主要活動から副次的活動へ移動するような働きは確認されなかった、ということが分かった。

<<口頭発表>> (9月6日 10:35-11:05)

【1号館C棟2F C6講義室】

文副詞「やはり」の配慮表現としての側面に関する考察

沼里 聡

本研究は、副詞「やはり」類（「やはり」、「やっぱり」、「やっぱし」、「やっぱ」/以下「やはり」で代表する）に着目し、会話データの観察を通じて「やはり」の配慮表現としての特徴と配慮のあり方の多様性を明らかにすることを目的とする。「やはり」には、話し手の意志や感覚から話し手の中にある社会通念・感覚、常識のようなものまで幅広い認識を前提とし、これを参照したことを示す働きがある。これに由来して、聞き手や読み手に悪い感情をもたれないようにし、対人関係を良好に保つことに配慮して用いられる表現、すなわち配慮表現としての側面があることが認められた。従来言われてきたような、社会通念や常識を盾に共感を呼び起こすストラテジーとしての捉え方とは別に、相手に配慮し謙虚な態度を表明する性質がそこにはある。ポライトネスとの関連も踏まえた上でそれらの詳細を明らかにし、「やはり」の配慮表現としての側面を浮き彫りにした。

<<口頭発表>> (9月6日 11:10-11:40)

【1号館C棟2F C6講義室】

3人会話における「言い切り形」の談話機能

甲田 直美

日本語の会話においては、発話末に終助詞「ね」「よ」や接続助詞の言いさしが多く用いられ、これらの付加要素を伴わない形式が用いられる割合は少ない。終助詞や接続助詞等の付加要素を伴わない形式を「言い切り形」とよび、これらの形式がどのような文脈環境で用いられているかを、収集した1025の事例をもとに考察し、2人会話と3人会話では言い切り形の出現状況が異なることを示した。3人会話では、ぼけに対しての突っ込みやヤジ、合いの手を、あたかも受け手を特定しないかのように言い切り形で提示することが多用されていた。3人会話における単体用法については、あたかも受け手を特定しないかのように言い切り述語で割り込む手法が用いられていた。多人数会話での聞き手の役割として、あたかも傍参与者へ向けたかのような手法として終助詞などを伴わない言い切り形が多用されていた。

<<口頭発表>> (9月6日 11:45-12:15)

【1号館C棟2F C6講義室】

「発話頭のハ」による近接化の役割
—丁寧に接しながら親しげにも接する言語活動に注目して—

宮本 淳子

近年の日本語における課題として、遠近親疎の「遠」の相手に対し、「遠近」両ストラテジーを同時に用い、丁寧に接しながら親しげにも接すること、すなわち言語的に「失礼でなく触れる」ことの難しさが挙げられている。本研究では、上下関係の下側が、語尾に敬語を伴って使用する「発話頭のハ」（以下「ハ」）が、その課題を達成するための役割を担っていることを、会話データ分析と「ハ」の有無による印象調査により示す。対象とした会話データ（20件）では、「ハ」が目上の相手にとって失礼だと受け取られたようなケースは確認されず、全てが近接化に成功していた。また、印象調査では、「ハ」の有無に気づかない者もあり、違和感なく会話に馴染んでいることが確認できた。一方で、「ハ」があるほうが「冷たくない」「親しい関係」といった回答も得られ、「ハ」が近接化により親しさを提示し得る可能性を示唆している。

<<口頭発表>> (9月6日 10:00-10:30)

【1号館C棟2F 大講義室1】

会話中の演技の連鎖構造
— 「設定」について話すことと「演技」をすること —

臼田 泰如

本研究では、会話における演技の連鎖構造について明らかにする。特に、なんらかの経験を説明する語りの中に現れる演技(西阪 2008 他)ではなく、演技それ自体がそれを含むターンの行為になるようなものに焦点を当てる。

演技は「想像の空間」(西阪 2008)を作り出し、その後の相互行為の資源となることが指摘されているが、「想像の空間」の成立に先立って、その空間がどのような時空間的・論理的フレームに基づいて構成されているのかが明らかになることが要請される。本研究ではそのような時空間的・論理的フレームのことを「想像の論理」と呼ぶことにする。つまり、「想像の空間」を作り出す演技は、「想像の論理」を提示する「設定」の発話と連鎖的に結びついている。

参考文献

西阪仰 (2008) 『分散する身体 エスノメソドロジ－的相互行為分析の展開』東京：勁草書房。

<<口頭発表>> (9月6日 10:35-11:05)

【1号館C棟2F 大講義室1】

会話の分裂を巡る投機的な発話と活動の分岐
—音声会話の場の変容に関する事例分析—

名塩 征史

本発表では、飲食を始めとする会話以外の副次的行為を断続的に伴いながら進行する日本人女性4名の会話を取り上げ、1つの会話活動が2つに分かれる「分裂」の共創について具体的な事例をもとに考察する。

言語的に特定の次発話者を指定しない発話は、話者交代に係る完結した機能が発話者自身によって付与されていない「投機的な行為」と言える。本発表では、まずこの発話の投機性が副次的行為との競合の中で、自己の志向を会話から逸らす機会を各参与者に与える、すなわち分裂の生成を支える性質であることを示す。

また分裂の成立前後に、会話と副次的行為を聴覚的・視覚的モダリティの巧みな切り結びによって両立させる参与者を接点として二つの活動が並行する「分岐」の状況が見受けられること、そしてある参与者が他者の振る舞いを通してある行為の可能性に気付くという「他者の認知の利用」が分裂・分岐の生起を支えていることを示す。

<<口頭発表>> (9月6日 11:10-11:40)

【1号館C棟2F 大講義室1】

会話分析研究におけるマルチモダリティ概念の使用について

平本 毅

昨今の会話分析分野において、非音声言語的な情報伝達様式あるいは行為の資源が相互行為の編成にどうかかわるかを分析する研究群は、マルチモーダル分析／マルチモーダル会話分析等と称される (Sidnell & Stivers, 2005; 細馬・片岡・村井・岡田, 2011)。本発表では、文献調査と日常会話の録画データ (約20時間) の分析から、「マルチモダリティ」概念が、会話分析研究の経験的な仕事の中でどう位置づけられるかを整理する。分析に先立って複数のモダリティの存在を論じることが少なくとも会話分析研究にとっては論点先取であり、人の行為を「マルチモーダル」と記述できるかどうかは徹底的に実践の側の問題であることが明らかにされ、会話分析の経験的研究における「マルチモダリティ」概念が、人の行為を記述する道具として使う際には注意を要するものであることが結論づけられる。

<<口頭発表>> (9月6日 11:45-12:15)

【1号館C棟2F 大講義室1】

態度表明を表す発話ターン末尾における「なんか」についての考察
—同意を得られにくい状況の下で—

呉 青青

本研究は、自然会話をデータとし、会話分析の枠組みを用い、ターン末尾の「なんか」が相互行為上でどのような機能を担っているのかについて考察したものである。本研究の主張は以下の通りである。同意を得られにくい状況の下で、自己の態度表明を表す発話のターン末尾に使われる「なんか」は**increment**であり、具体的に「語気を弱める」「発話をデザインする」「話題を終結する」「自画自賛を避ける」のような働きで用いられる。ただし、「語気を弱める」という働きが末尾の「なんか」の最も本質的な機能であり、「発話をデザインする」「話題を終結する」「自画自賛を避ける」という働きが行為連鎖で派生した機能であると思われる。その三つの派生した機能が単独で実現するのではなく、「語気を弱める」という機能を通して実現すると思われる。さらに、末尾の「なんか」が使用される理由は、対人的動機と認知的動機が働いたためではないだろうか。

<<口頭発表>> (9月6日 10:00-10:30)

【1号館C棟1F C3講義室】

政治談話における修辞構造分析
—安倍晋三総理大臣の再執権後の談話構成を中心に—

韓 娥凜

本発表では、安倍晋三総理大臣の政治演説を取り上げ、再執権した後の覚悟・意志が談話の構造にどのように反映されているかについて明らかにする。分析データは安倍晋三総理大臣の年頭所感（第一次内閣～第三次内閣）を扱った。これらの演説を比較することにより、再執権した後の安部首相の意図・目的が演説の構造にいかに関与しているかが確認できる。分析方法は修辞構造理論（**Rhetorical Structure Theory**）に基づいて行った。分析の結果、第一次内閣の演説では事実を単純羅列する形の「列挙」や「連続」による談話構成が最も多かった。一方、再執権に成功した後の演説では自分の主張を相手に認めてもらうための根拠を示す「正当化」や「証拠」などの修辞構造が多く用いられていた。このような違いがみられた理由は、一度失敗した第一次内閣とは異なるイメージを作るといった安部首相の意図・目的が談話の論理構成にも反映された結果であると考えられる。

<<口頭発表>> (9月6日 10:35-11:05)

【1号館C棟1F C3講義室】

1990年前後の新聞の皇室敬語
— 「崩御」と「ご逝去」の差はどこからきたか—

杉森 (秋本) 典子

1989年の天皇死去報道に戦前の用語「崩御」を復活させた新聞と、一般的な「ご逝去」を使った新聞があった。その差はどのように生まれたのか。1989年には敬語を使っていた朝日新聞は、その後どのようにその皇室報道の敬語を減らす編集方針にかえていったのか。これらの疑問に答えるため、当時の新聞社や新聞労連の関係者をインタビューし、新聞社の内部資料を分析した。その結果、朝日の皇室への敬語簡素化の方針は、昭和天皇の死去以前からすでに準備され始めていたことがわかった。しかし漢語の敬語と動詞につく敬語では当時の担当者の簡素化への意識に違いがみられ、その違いをiconization (Irvine & Gal 2000) の理論を援用して説明を試みる。地方紙の敬語使用が全国紙の敬語使用に影響を与えた可能性についてもふれる。このことは言語遣いの変化を考える時の、マクロとミクロの関係の理解を深めるのに役立つ。

<<口頭発表>> (9月6日 11:10-11:40)

【1号館C棟1F C3講義室】

滄源ワ族自治県の文字使用状況
—無文字から多文字併存へ—

山田 敦士

中国雲南省西南部に居住するワ族は固有の文字伝統をもたない民族集団である。しかし建国後に漢語ピンイン方式に準じたローマ字転写法（以下、政府式表記法）が考案され、現在、政治・経済的に不可欠な漢字との二文字併存という、当地の少数民族地区の典型的な構図の只中におかれている。しかしながら、近年の発表者のフィールド調査によって、ワ族の居住地の中心の一つである滄源ワ族自治県において、この政府式表記法や漢字のほかに、**3種類**の文字表記（宣教師式表記法、ミャンマー式表記法、インド系文字）が使用されていることが確認された。こうした多種の文字表記による社会的・言語的動態は、これまで焦点化されることがなかった。本発表では、発表者自身のフィールド調査の結果に基づき、それぞれの文字表記の使用状況について報告し、その上で無文字から多文字へという社会変容にともなう言語動態について分析をおこなう。